

---

# 止まらないダンス

山川雷太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

止まらないダンス

### 【Zコード】

N5187C

### 【作者名】

山川雷太

### 【あらすじ】

十五世紀北インドのミラバイ王女の逸話。王女として嫁いだミラバイは、王家の因習や戦争に嫌気が指して、ヒンズー教のクリシュナに恋するように信仰の道を歩みます。やがて全てを棄てて旅にでたミラバイを待っていたことは？

## (前書き)

この作品はハートフル・レジェンドという短編集にある物ですが、読みやすいサイズだし、結構好きな人が多いので、個別に投稿します。なお、あくまでも伝説逸話を基にしましたフィクションです。実在する人物や組織とは一切関係ありません。

ミラバイが体を捻り、バネが開放されるように回転すると、玉の汗が伸ばされた手先や撓る毛先から飛び散った。日の光りが汗を無数の銀の粒のように煌かす。はつとするような独特的のリズムに筋肉が躍動し、体は次の瞬間、宙に舞う。薄いシルクのサリーは空気の流れではためき波打ち、肩から僅かに外れ、胸の谷間が柔らかく深くなつた。顔を隠すベールは泳いで捲れ、濃いまつげに彩られたエキゾチックな漆黒の大きな瞳に、歓喜が宿つている。細い額先は僅かに上を向き、額からは汗が滴り落ちてベールを濡らす。羽毛のような軽さで地に戻ると、片膝が軽く上がり、再び回転が加わる。時に緩く、時に素早く、サリーは崩れ、肩は顯に、ベールが外れて笑顔をさらしたミラバイが踊る。

十五世紀、北インドのメワール国では、厳しい仕来りがあつた。全ての女性は家の外で、他人に顔や肌を見られてはならなかつた。でも、この国の王女、ミラバイは氣でも狂つてゐるか、城門の人だかりの中で踊り続けている。

「あの狂い女を何とかしろ！」

ビクラ王が叫んだ。

メラタ国の王女ミラバイは十八才の時にメワール国へ嫁いで來た。相手は王子ラジャ・ボージヤだった。しかし、夫は結婚後直ぐに回教徒との戦いで戦死してしまつた。新国王になつた義理の弟、ビクラ・マジタは未亡人ミラバイが厄介者にしか思えない。

『くそ！あんなにふしだらな格好して、人前で踊り続ける売女め』ビクラ王は心の底から兄嫁をなんとかしたいと思っていた。王家に泥を塗る他国の女を殺したいとさえ思つた。だが、兵士を差し向けて踊りを止めさせようとすると、ミラバイに見つめられた兵士達は皆萎えてしまつ。ミラバイにクリシュナ神、ヒンズー教の神の人が宿つてゐると言うのだ。そうでなければ、のように、顔は美

しく可憐に輝がないと言いた。

兵士達を鞭でいくら打つても、ミラバイを敬う兵士がどんどん増えるばかり。毒殺しようとする、毒を盛った飲み物がいつの間にかミルクに変わってしまう。花束にコブラを忍ばせて、クリシュナ神の彫り物に入れ変わってしまうのだ。ビクラ王は、彼女を崇拜する人間が増えていることに苛立つが、どうするか決め手に欠き悶々としていた。

「王よ、ミラバイをこの国から追い出すか、幽閉するべきです」

重臣が言うのも尤もだ。でも、ミラバイは隣国メタラの王女。メタラ国との関係も考えねばならない。しかしこれ以上、家紋に傷をつけるわけには行かない。王はミラバイを追放するために兵士を呼び集めた。するとそこへ、ミラバイは笑顔でやって来る。

「ビクラ王、ありがとうございます。クリシュナ神が私にささやいて、あなたが私を勘当してくれるとお聞きしました。私もこれ以上、王女として因習にまみれた生き方が辛くて仕方が無かつたところです。喜んで今すぐ城を出て行きます」

ビクラ王はあいた口が塞がらなかつた。なぜ我らの話の内容を知つているのだ？ そう思つてミラバイを見つめると、ミラバイはその華奢な顔立ちを少し横にかしげて微笑んでいる。ビクラ王はミラバイをふしだらで貞操の無い女と思い込んでいたが、よく見ると、兄が惚れただけあって美貌だ。だが、許せない。兄が戦死したら、妻は自分の身を焼いて後に続くのが国の仕来り。なのに、このミラバイは後追い死もせずに、自分の夫はクリシュナ神とつて憚らないばかりか、顔と体を人前でさらし、毎日踊り狂つてゐるのだ。

「ミラバイ王女、あなたの日々の行動が、王家の顔に泥を塗つてゐるのだ。もう一度と戻つてこないで欲しい。再び貴方を我が城で見たときには、我が剣が貴方を貫くだろう」

「クリシュナの妻、ミラバイを殺す事があなたにできるでしょうか？」

ミラバイはそう言つと、大きな鉢植えが涼しい影を落としたテラ

？ 私はすでに自由で虚空！」

ス側の通路を、僅かに踊るように、爽やかな笑みをこぼして去つて行つた。

『馬鹿女め！ 王の権威に服しない、我がままの極地に狂つた女は、これから世間の苦しさに彷徨い苦しむのだ』

ビクラ王はミラバイの喜び溢れて浮かれるような後姿を、忌々しく睨んだ。

ミラバイは社会のじがらみから自由になつたことが心から嬉しく、着の身着のまま城を出た。牧草地を緩く曲がる小道、ゆっくりと風に吹かれて歩いて行く。小道は涼しい森に誘われ、いつしかミラバイはクリシュナを称えて歌う。

切ない愛に 満たされて  
ミラバイは 溺れてしまいそう  
道から道へ さすらえば、  
そこかしこで あなたと出会える  
王家の娘は もうすでに  
あなたを求める さすらい人  
どうして 城にもどれよう

風の中に自分の歌が聞こえ、咲き乱れる花々の色彩がミラバイの歌を聴いている。花々の匂いが放たれ、拍手が起つてているのだ。木立の木漏れ日は風に揺れてざわめき、ミラバイの歌を密やかに聴いている妖精達の息吹を感じる。涼しい森にミラバイの歌が流れて、ミラバイの喜びが森の小道を照らし、小鳥達が飛び交いながら唱和した。

沙門ミラバイはクリシュナを称えて踊り歌い、純朴な村人達に支えられながら旅を続け、クリシュナ神が幼少時を過ごした聖地、ヴァリンダヴァンに着いた。そこにクリシュナを祀る最も有名な寺院

があり、敬虔な聖者として名を馳せたジーヴァ・ゴースワミが主席僧侶として勤めていた。このジーヴァは、僧侶になつた時に、これから生涯、どのような女性も見ないと誓う誓いを立てた。そして、三十年間それを守り通したために、寺院を一度も出たことが無かつた。

ミラバイは踊る。寺院の門前に人だかりができる。ミラバイは人々に囲まれても、ミラバイが見つめているのは己の内側のクリシユナただ一人。クリシユナの心がミラバイに流れて来ると、顔が輝き、体が躍動した。クリシユナがミラバイの踊りを見つめると、ミラバイは歌つた。クリシユナが歌を聞くと、ミラバイは宙を舞い踊つた。体が火照っている。汗が噴き出した。ミラバイの喜びが見物人を感じさせ、その内の一人がクリシユナを賛美するマントラ（唱言）を唱え、回転しながら踊るミラバイに祝福の水を浴びせる。水しぶきがあがり、光りの粒が飛び、虹が現れる。ミラバイの顔はさらに歓喜を増し、見物人は跪いた。門の衛兵もいつしか魅せられ、役目を忘れ去つた。

ジーヴァは日課のクリシユナへの祈りを捧げていた。門から歌が聞こえてきた。だが、彼の祈りは深い。クリシユナを求め、クリシユナの教えに従い、クリシユナの声を聞くために、三十年間一度も怠らなかつた日々の行だ。何があるうと、この祈りを妨げる者は今まで誰も居なかつた。なのに、いつの間にか、ジーヴァの直ぐ後ろで、敷き詰められた石畳の庭を誰かが飛び跳ねる音がする。刹那、驚いて怒りがむくむくとジーヴァを捉えた。

「だれだ！ 私の祈りを邪魔する者は？」

ミラバイは地を蹴り、飛び上がつた。地に着くと、歌いながら体を捻り、片足を高く上げ、回転する。ベールもはずれ、サリーは崩れて、身体が顕に見えた。ふり向いたジーヴァは両手で目を覆つたが、遅かった。彼の目には美貌のミラバイが映つてしまつた。顔も体も見えてしまつた。手のひらで覆つた顔が惨めに怒りで歪む。

『なんと言つ事を！ 三十年間の誓いが……』

「出て行け！ ここは女人禁制の場所、早く出て行ってくれ！」

ジーヴァは目を覆いながら叫ぶ。手足と声が怒りで震えた。だが、その乱れて狂ったような女はジーヴァを見て、心を見透かしたように優しく微笑んでいる。この世の者とは思えない喜びを湛えた微笑、そしてジーヴァを見つめる瞳は、指の間から覗くジーヴァに、狂気では無く、静かで、正氣で、聖なる瞳として写った。ミラバイは何も言わず、じっとジーヴァを見つめ続ける。愛に溢れ、優しく、女性そのものの眼差しが、ジーヴァの拘りを打ち払い、迷妄を融かす。ジーヴァは顔を覆った両手をだらりと下げてしまった。誓いは破られたのだ。

ミラバイは数歩ジーヴァに近づくと、ジーヴァを見つめて静かに言つ。

「神の前では、人は全て女性です。あなたもよ！ 聖者ジーヴァよ、三十年もクリシュナを礼拝して来て、それでもあなたは、自分が男だとでも仰るのかしら？」

ミラバイはそう言つと、クリシュナの奥殿に向かつて歌い始めた。

住んでくださいませ 私の目の中に クリシュナよ

その褐色の肌の色、お顔の輝き、眩い横笛を吹く赤い唇 胸に掛けたビショヌの首飾り

住んでくださいませ 私の目の中に クリシュナよ

鈴の音が光りを誘い 麗しき足元にひれ伏せますよ

ああ、私の中のクリシュナよ 歓び満たされ神々しく あなたは私の目の中に  
住んでくださいませ

ジーヴァは歌声が遠くから聞こえたり、耳の近くで聞こえたりした。ジーヴァが心の中で歌を聴いていたからだ。自分の心を開いて、歌を聴く。生まれて始めての体験に驚愕してしまった。それに気づくと、ジーヴァはその女が自分よりクリシュナと親しい事がはつきりと判つた。否、きっと女はクリシュナの使いなのだ。己の誤謬を諭すために使わされた。三十年間、ジーヴァは寺院の中のクリシュナを、頑なに礼拝するだけだった。だが、この女は歌と踊りをずっと己の中のクリシュナに捧げてきた。ジーヴァは体の力が抜け、女の前に額<sup>ヒ</sup>ずいてしまう。自分の都合で立てた誓いに何の意味がある。この女は顔も体もさらしながら、乞食のような身なりに成り果てても、クリシュナを感じている。感じているから愛せるのだ。

#### 『神の前で人は全て女性』

その言葉こそ、ジーヴァを貫いた。神を感じ、愛し、そして仕える者。クリシュナは我が礼拝より、この乞食の女の歌をお聞きになり、踊りを『<sup>ヒ</sup>覧になつた。ジーヴァは自分の世界が大きな音を立てて瓦解して行くことに気づいた。

「我が目に、三十年ぶりに触れた女性よ！　もう一度あなたの踊りを私に見せてはくれぬだろうか？」

ジーヴァはやつとの思いでミラバイに小さく言つた。ミラバイの顔が見る見る内に輝き、体が揺る。ジーヴァの前を美しい女神が飛んだ。寺院に風が吹き込み、ミラバイのサリーがそよぎ、髪の毛が流れる。黒い瞳は内側のクリシュナを写して、ジーヴァを見つめる。ジーヴァは震え、涙が止め処なく溢れる。ジーヴァは初めて師を見出したと思った。

ミラバイが去つた後のメワーラ国は、因果応報、災難に見舞われていた。世間体を気にして、家柄や体面をひどく気にするビクラ王の時世は、隣国との関係がどんどん悪化して行つた。王室の権威や

建前を守るために、ミラバイを追い出したようなビラク王の考え方と政治は、どこか歪<sup>いびき</sup>なのだろう。民衆や兵士達はミラバイ王女を懐かしがつた。ミラバイが居なくなつて、人々は王女がキチガイ女と揶揄されながら、自ら率先して因習を打ち壊し、自由の雰囲気を国にもたらしていたと悟つたのだ。

他国との不和が高じれば、やがては戦となる。外敵が侵入して来るのは当たり前かも知れない。やはり稀に見る大きな戦が起こつた。かつて無いほど、多くの兵士が死んでしまつた。残された女子供も、国の仕来りで自害せざるおえなくなり、民衆は悲しみ、憤りと怒りを王ビクラに向けた。國は暗くなり、人々はミラバイを追放した天罰だと日々に叫んだ。ビクラ王は民衆をなだめるために、ミラバイを呼び戻す事を考えて、ドルワカと言つ若者を使わした。ドルワカは昔からミラバイに帰依していた兵士の一人だつた。

「ミラバイ王女、是非ともメワーラに戻つてください。人々があなたを求めているのです。戻つていただけなければ、私はここで死ぬまで断食致します」

ビクラ王の本心がわかるミラバイは、戻ればまた、つまらぬ世間の争いに巻き込まれることを知つていた。しかし、ドルワカの熱意と彼の民衆を思う気持ちは本物だつた。困つたミラバイは少し考えて言つた。

「ドルワカ殿、では、一晩、私に寺院の中で祈る時間をください。翌日の朝、あなたと共にメワールに戻れるでしょう」

ドルワカは嬉しかつた。一緒に戻つてもらえば、民衆は安心できる。そして、國も立ち直るだろう。そう思つと朝が來るのが待ち遠しい。

しかし翌日の朝、どうしたことか、礼拝の間の中央にミラバイの美しい髪が切られて束ねられ、その脇にはミラバイの衣服がきちんと畳まれて置かれていた。ミラバイは消えたのだ。いや、人々は囁き合つっていた。

『ミラバイは天に召された』

ドルワカは置かれた髪の毛を抱きしめて、思つた。

『ミラバイ王女は何処に行かれたのだろう?』

途方にくれるドルワカの肩に優しく手を置いた者がいた。ふり返ると、聖者ジー・ヴァだつた。

「ドルワカ殿、ミラバイ王女がどこに消えたのかを訊ねてはなりませぬ。人の体の中で、長く腐らぬものは髪の毛ばかり。女性として最も大切な髪の毛をあなたに残した意味を受け取り、あなたの国へ帰国あれ」

ドルワカはミラバイの髪を大事に持ち帰り、民衆に言った。

「ミラバイ王女は自らの髪を我らメワー・ラの民に遣わし、御身はクリシュナと共に歩まれている。ミラバイ王女は言われた。我はいつもメワー・ラの民と共にあり」

この時から、夫への追死の変わりに、女は髪を切つて供えたと言う。ミラバイの髪は、メワー・ラの寺院に置かれ、因習に囚われない自由な女性の象徴として、今も人々の信仰を集めている。

(了)

## (後書き)

自分の作品の中で個人的に好きな作品を上げれば、この短編です。芸術でもスポーツでも忘我の境地にある人々はきっと、ミラバイのようにクリシュナや天の声を聞いているに違いないと思うのです。あるいはあなたの側に歌いだしたり、踊り出す人がいないでしょうか？もし居たら、ミラバイと同じように世界を感じているのかもしそませんね。

このサイズのお話を継続して書いてゆきたいのですが、なかなか難しいのです。お読みいただきありがとうございました。またいつか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5187c/>

---

止まらないダンス

2010年10月8日15時04分発行